聖　書：コリント人への手紙第二 10：1〜11
説教題：建てるための権威
日　時：2025 年 2 月 16 日（朝拝）

コリント人への手紙第二は、この 10 章から雰囲気が大きく変化します。パウロとコリント教会の間には難しい問題がありましたが、その関係は今や回復したという喜びがこれまでは支配的でした。7 章 16 節でパウロはこう言いました。「私はすべてのことにおいて、あなたがたに信頼を寄せることができることを喜んでいます。」　この関係回復に基づいてパウロはエルサレムの貧しい聖徒たちのための献金プロジェクトについて再度 8〜9 章でアピールし、その最後の 9 章 15 節ではこのように感謝の言葉を述べました。「ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」　ところがです。今日の 10 章から最後の 13 章にかけては厳しい調子の言葉が続きます。ここでパウロは自分を批判する敵対者たちに対して激しい口調で反論します。このため、果たしてこれは一つの手紙なのか、別々の時に書かれた手紙をくっつけたものなのか、等々多くの議論があります。それをここで細かく述べることはできませんが、おそらく最も良いのは、1〜9 章までを書いた時点で新しい情報がパウロのもとに届いたと見るものです。パウロはコリント教会との関係が回復したという知らせを受けて安堵してここまで書いたものの、その後、敵対者たちが盛り返しているというさらなるニュースに接しました。偽使徒、偽教師たちがパウロへのさらなる反対活動を展開し、コリント教会をかき回しているというニュースです。そこですでに書いた手紙はそのままにして、そこに新しい状況に対処する 10〜13 章の言葉を加えたということです。そういう前提で今後の箇所を見て行くことといたします。

さて出だしの 1 節からただならぬ雰囲気です。彼は「さて、あなたがたの間にいて顔を合わせているときはおとなしいのに、離れているとあなたがたに対して強気になる私パウロ自身が」と語り始めます。一体この自己紹介は何か？と思います。これは反対者たちの言葉をそのまま引用したものです。そのことは 10 節を見ると分かります。コリント教会の中には、このように言っている人たちがいました。「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話は大したことはない。」この表現には、その背景があったと考えられます。それについては実はすでに見て来ました。パウロは第 3 回伝道旅行でエペソで集中的な伝道を行っていましたが、コリント教会に問題が生じていると聞いて急遽コリントを訪問しました。しかしすでに見

た通り、それは残念な結果に終わりました。問題の中心にあった人が悔い改めるどころかパウロに逆らって立ち、その他のコリント教会のメンバーも適切な対応を取らなかったため、パウロはコリントを退きました。そしてエペソに戻り、そこから「涙ながらに書いた手紙」を書き送りました。それはコリント教会の悔い改めを求める厳しい内容の手紙だったようです。その手紙は結果的に功を奏しました。ところがパウロの反対者たちの動きはそれで止まらなかったようです。彼らは一層ひどくパウロに対するネガティヴキャンペーンを展開しました。その中心にあった言葉がこれだったと考えられます。パウロは手紙ではいかにも力強く、権威ある者のように書くが、実際に会ってみると弱々しく、その話しぶりもなっていないと。これは特に前回コリントを訪問した際、パウロが何もできずに退散したような結果になったことを指したものでしょう。この反対運動の中心にあったのは、このあと色々言われる偽使徒、偽教師たちです。彼らは雄弁な人たちだったようです。その彼らと比べるとパウロは見劣りするところがあったようです。そこで彼らは、パウロは使徒として尊敬されるにふさわしい人間ではない！とやり始めた。遠く離れて安全な場所にいる時は威勢のいいことを言うが、会ってみると全然大した人間ではない。遠くから偉そうなことを言うだけの卑怯な人間であると。その言葉に再びコリント教会も動かされるという揺れ戻しがあったのでしょう。そのため、パウロは弁明を強いられたのです。これは個人的名誉のためではありません。パウロが否定され、捨てられることは、彼が伝えた福音までもが否定され、捨てられることを意味します。これまでの働きがすべて水の泡になってしまいかねません。そこでこの状況に対応して書かれたのが 10～13 章であると考えられます。果たしてパウロはこれにどう対応したのでしょうか。以下 3 つのことを見て行きたいと思います。

まず一つ目はパウロはこの状況で「キリストの柔和さと優しさをもってお願いする」という道を進んだということです。これがパウロの基本スタンスでした。彼は普段からこのような姿勢で奉仕したために、ある人々から「弱々しい」とか「おとなしい」とか「無力な人」と見られたようです。そう言われるなら、もうこの路線はやめて、力で対抗しようかという道をパウロは取りませんでした。彼はなおこの状況でも「キリストの柔和さと優しさをもって」彼らに接します。しかも「お願いします」という低い姿勢で関わっています。

「キリストの柔和さと優しさ」と言われているように、これはまずイエス様ご自身

が示された姿でした。イエス様はマタイの福音書 11 章 29 節で「わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい」と言われました。またイエス様は神の国のリーダーとなる者は、この世の支配者たちとは違って、次のようでなければならないとマタイの福音書 20 章 25〜28 節で言われました。「あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」　ですから教会の役員となる者も、そのようでなければならないと言われています。テモテへの手紙第一 3 章に監督すなわち長老の資質が述べられていますが、そこに「柔和で、争わず」とあります。柔和とは怒りっぽいこと、すぐに憤ることの反対です。前の 2 節に「自分を制し」とあることとも深い関係があります。自分を制御できるということです。すぐに沸騰しない。それは相手の益を何よりも考えて行動するためです。むしろ穏やかであること、温和であることが求められます。ですからここでも「優しさをもって」と言われています。これが神の国のために働く人に求められることです。キリストが進まれた道と同じ道を行く人でなければなりません。

確かにこれは何をされてもいつまでも笑顔で優しく接するということではありません。イエス様は「悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい」と言われましたが、大祭司アンナスの前で平手で打たれた時、反対の頬を向けませんでした。むしろ「わたしの言ったことが悪いのなら、悪いという証拠を示しなさい。正しいのなら、なぜ、わたしを打つのですか」と抗議されました。パウロもここで警告の言葉を語っています。2 節で「私たちが肉に従って歩んでいると見なす人たちに対しては、大胆にふるまうべきだと私は考えています」、また 6 節後半で「あらゆる不従順を罰する用意ができています」、そして最後の 11 節で「そのような人は承知していなさい。私たちは、離れて書く手紙のことばどおりの者として、そちらに行ってもふるまいます」と言っています。しかし彼はそうならないように願っていると 2 節で言っています。それをしなくて済むようにしてほしいとお願いしています。これが批判された中でパウロが取った道です。弱々しいと誤解され、中傷されても、パウロがなお取った路線は「キリストの柔和さと優しさをもって」とい

う道です。まずこのことを心に留めたいと思います。

二つ目は、パウロはこの状況でどのように戦うのか、その武器は何かということに関してです。4 節に「私たちの戦いの武器は肉のものではなく」とあります。ある人々はパウロは肉に従って歩んでいると非難していたようです。彼は優柔不断な人間である。我々の目の前に立つ時は弱々しい者でしかないのに、離れたところにいると力ある者であるかのような手紙を書いて来る。これは真の力を持っていないからである。彼は人間的な方法に頼っている！と。パウロはそうでないと言っています。3 節にある通り、「肉にあって歩んではいても」、すなわち弱い人間の肉体を持って歩んでいる者ではあっても、「肉に従って」、すなわち人間の力に信頼して戦っているのではない。そうではなく、私たちの戦いの武器は「神のために要塞を打ち倒す力があるものです」と言います。このパウロの武器とは何でしょうか。それについてははっきりここでは言われていませんが、同じコリント教会に宛てた第一の手紙から彼が何を考えていたかは想像できます。第一コリント 1 章 18 節：「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」　1 章 23～24 節：「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」　十字架のメッセージは人々にとってつまずきとなり、また愚かに思えることですが、これこそ神の力、神の知恵であると言いました。つまりこれこそ神の武器であるということです。また 2 章 1～2 節で「兄弟たち。私があなたがたのところに行ったとき、私は、すぐれたことばや知恵を用いて神の奥義を宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです」と語り、4 節で「そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした」と言いました。当時のギリシャ世界では雄弁術がもてはやされました。今日の箇所の 10 節にパウロを指して「話は大したことはない」という言葉がありましたが、当時の雄弁術からするとパウロの話し方はそのように見下されたのでしょう。しかしパウロはそのような優れた言葉や知恵により頼まず、十字架につけられたキリストを伝え続けました。そこに御霊の力が現れました。つまり御霊に信頼し、祈りつつ十字架の福音を伝えること、これこそが神の武器であるということです。それが要塞を打ち倒すと言われています。これは神に対して自己防御しようとする私たちの心

の状態のことです。神の言葉を受け付けず、跳ね返し、今の自分を守ろうとする。そのため、5 節にある通り、様々な議論を持って来ます。色々な理屈や論理で対抗しようとします。そうして高ぶり、自分は正しい、自分は神など必要ではないというスタンスを保とうとする。ところがこの神の武器はそれらを全部打ち倒すと言われています。その要塞を破壊し、議論を壊し、高ぶりを打ち倒す。そしてついにキリストに服従させる。これはまさに私たちに起こったことではないでしょうか。最初は身構えて、そう簡単には動かされないぞ！と自らを守る姿勢を取っていたのに、その要塞を壊され、議論を壊され、高ぶりも壊され、ついにはキリストの主権の下に額づく者とされました。これがパウロがより頼む神の武器であるということです。私たちは話し方を研究しても良いかもしれません。しかしその技術が人を救うのではないのです。むしろ率直な福音宣教が大事であるということです。十字架の福音を聖霊に信頼し、祈りつつ語ること。人間の知恵ではなく、神の知恵により頼み、神がこれを用いてみわざをなしてくださると信じつつ取り組むこと。これが私たちの武器であり、この姿勢で神の働きに当たることが大切であることを改めて教えられるのです。

パウロが三つ目にこの状況で示している対応は主に与えられた権威を誇るということです。7 節でパウロは「あなたがたは、うわべのことだけを見て」いるが、「もう一度よく考えなさい」と言います。そうすれば私たちがキリストに属していること、すなわちキリストのしもべであること、特に使徒であることが分かるはずだと言います。そして 8 節で「主が私たちに与えてくださった権威について、私が多少誇り過ぎることがあっても、恥とはならないでしょう」と言います。こう述べて彼はこの後、主に与えられた権威を誇って行きます。誇ると言っても人間的な自慢とは違います。主が与えてくださったものであることをその通り、正当に主張することです。そのことをする必要がない状況ではしなくて良いのですが、必要であればやむを得ず主張するということです。そのように主が与えてくださった権威を誇る話がこの後、続きます。一見、偽使徒・偽教師たちと張り合っているようでもあります。彼らと同じ土俵に上がって、どっちがすごいか競い合っているようにも読めます。しかしそこを読む上でキーワードになるのは、パウロがこれを「愚かだ」と断っていることです。偽使徒たちはそう思っていません。彼らはこれこれのゆえに自分たちはパウロより優れていると誇っていました。しかしパウロは「愚かなことですが」と言って、その土俵に上ります。つまりそういったことを誇るのは愚かだと言っているわけです。パウロはそうしてコリント人たちに偽教師たちが誇っているようなことを誇るのは愚かだと

知ってもらいたいのです。そして途中からパウロの話は真に誇りとすることへと移って行きます。その中で使徒として受けた様々な苦難が列挙されます。それはキリストが進んだ道とダブって見えて来る道です。そしてその結論となる 12 章 9〜10 節で「キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」という言葉に行き着きます。ここに真の使徒とはどういう者かをパウロは示して行きます。自分がいかに優れているかを示して誇示する人ではなく、弱さにおいて神の力を証しする人です。そのような使徒とされていることを弁明して行きます。

その権威について 8 節に「倒すためにではなく、建てるために主が私たちに与えてくださった権威」とあります。この「建てる」という言葉は「家を建てる」という意味の言葉です。これは相手の成長に仕えること、そして特に教会を建て上げるという意味で使われています。ですからその権威は皆の益と祝福に仕えるためのものです。自分を主張して他の人を倒すのではなく、人々に仕え、人々を建て上げるために与えられているものです。そのためにパウロはなお「キリストの柔和さと優しさをもって」接するのです。そのように用いて行くべき権威なのです。

イエス様は世の「支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。あなたがたの間では、そうであってはなりません」と言われました。そして「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい」と言われました。私たちがいつしかこの世の価値観や流行思想に影響されて、この世が褒めるような人を教会でもほめそやし、賞賛し、持ち上げる者たちとなることがないように。そうして神の国に異質なものを持ち込み、そこをかき回す者とならないように。むしろキリストを見つめ、キリストの柔和さと優しさによって歩む人たちに目を留め、これを尊ぶ者たちでありたいと思います。また私たち自身がその道を行く者たちでありたいと思います。私たちは使徒ではありませんのでパウロと同じ権威が与えられているわけではありませんが、それぞれが神から何らかの働き・使命とそのための賜物が与えられています。その私たちが進むべき道もパウロと同じくキリストの柔和さと優しさをもって仕えるという道です。それは自分の名誉や自己実現のためではなく、人々を建て上げるためです。この神が召していてくださる道を進み、神の御前で賞賛される者となり、神の国の完成のために尊い一翼を担わせていただく光栄とその幸いに生きる者たちとされて行きたいと願います。